Bulletin of the Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University (Psychology and Human Development Sciences) 2001, Vol. 48, 185 − 195.

分裂病者のコラージュ表現

── 統一材料を用いた量的比較 ──

今　村　友木子[1)]

問　題

コラージュ療法研究の流れ

コラージュ Collage とは，フランス語で「糊づけすること」を意味している。新聞，雑誌，パンフレットなどの文字や写真を自由に切り抜いたものを台紙に貼りつけて，一つの作品にするのである。日本での心理療法におけるコラージュの利用は近年，急速に活発化している。この10年間でコラージュを用いた心理療法事例の報告はかなりされてきており，技法上の工夫や，面接による治療効果，あるいはコラージュ療法が適用可能な対象領域などについて論じられてきた。その一方でコラージュ作品を量的に扱った基礎的研究はまだ数が少ない。

筆者は単科精神病院におけるコラージュ療法の経験から，分裂病者の独特な対象認知のあり方がコラージュ表現に反映されていることを感じている。そこで，一般成人のコラージュ作品と分裂病患者のコラージュ作品を比較して，様々な表現上の違いを明らかにし，その違いがどこから発生するものなのかを考えたい。

分裂病者のコラージュ作品については，Buck & Provancher (1972) が切り抜き数の少なさ，切り抜きの切断や分裂，重ね貼りの少なさ，芸術的な表現の少なさなどを特徴としてあげている。また Lerner & Loss (1977) は臨床群（神経症・境界例）と正常群の作品を比較した。臨床群の特徴として切り抜き数の少なさ，人間よりも動物の切り抜きが多いこと，全体のバランスが崩れ中心的テーマが見られないこと，治療者に確認することが多く，支持を求めること，色彩が抑えられている，人間の動きが不活発であること，手でちぎる切り方が多い，逆転・横転した切り抜きの貼り方が多いことなどを示した。作品の比較のための分析項目の設定などは，後年日本におけるコラージュ療法研究に引き継がれているが，被験者数が少ない（各群12人）点は問題が残っており，また分裂病者を扱ったものではない。

日本においては岡田・河野 (1996) が分裂病者の治療過程の中から，過剰な重ね貼り，断片化，恣意化（再構築の強引さ），極端な前景化（図と地のマッチングのなさ），キメラ的空間化（複数の異質の空間が重なり合う空間），背景化（遠近感の強調・重ね貼りの減少），格子状配置・力動感のなさといった表現特徴を見いだした。また上別府・海老沢 (1996) は分裂病者の中でも病型によって表現特徴が異なることに着目し，解体型，緊張型，妄想型に分けてコラージュ表現の特徴をまとめている。しかし，これらの研究は臨床例からの記述であり，Lernerらのような数量的評価に基づいたものではない。

越 (1998) は先行研究を踏まえて分裂病者の表現特徴を数量的に明らかにしている。この量的研究においても，分裂病者群は一般群と比較して切抜き数が少なく，全体的に表現が平板であるといったように臨床例からの知見と同様の結果が得られている。さらに表現内容に関しては，性や攻撃などの欲動がひとたび表れると画面がそれらの切抜き一色に支配されることなどを指摘している。

しかしながら越の研究においては，被験者がコラージュ作成に使用する材料（雑誌）が統一されていない。他の量的研究においても，これまで多くの場合材料が統一されてこなかった。心理臨床面接におけるコラージュ作成では多くの場合，作成者（クライエント）自身が持参した雑誌や面接者（カウンセラー）が用意した雑誌・切抜きなどを用いるため，当然ながら材料は統一されない。しかしコラージュ作品における一般群と対象群の様々な違いを検討するためには，材料統制は必須と考えられる。このため佐藤 (1998, 1999) は統一材料としてカタログなどから採集した細密ペン画のモノクロ図版シートを採用している。しかしこのペン画はモノクロということもあり，通常の心理臨床場面で用いられる材料とは非常に異なっている。さらに佐藤は素材の数も185個の図版 (1998) から最終的には10個の図版 (1999) に絞り込んでおり，被験者は非常に限られた素材を用いてコラージュを作成している。これは研究目的がコラージュ表現では

1）名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程（後期課程）

なく制作行動パターンを明らかにすることにあったためであろう。本研究は分裂病者のコラージュ表現の特徴を明らかにし，この結果を臨床場面におけるコラージュ理解に役立てることを目指している。このためできる限り一般的な臨床場面で使用されるものに近い材料を用いる必要がある。

本研究の目的

分裂病者と一般成人のコラージュ表現の違いを検討することにより，分裂病者のコラージュ表現の特徴を明らかにすることを目的とする。また，統一材料を使用することにより，これまでの量的研究や臨床的知見などで報告されてきた分裂病者のコラージュ表現特徴についても再検討したい。分裂病者の認知的特徴はコラージュ表現におけるはみ出しや切り抜きの横転・逆転に表れ，また活動性の乏しさや思考の硬さなどは切り抜きの量や表現内容に反映されるものと考えられる。

方　法

被験者

被験者は次の2群である。一般成人群114人（男26人，女88人,平均年齢46.1歳)。分裂病者群は59人（男30人，女29人，平均年齢55.7歳)。分裂病者は単科精神病院入院患者で診断名が精神分裂病であり，医師が状態安定と認めた者である。分裂病者のコラージュ作成は作成者が入院している病棟内の食堂などで行われた。その際，診断名が異なる患者（非定型精神病，躁うつ病など）も同時に作成した。作成に参加した病棟入院患者は計74人であり，このうち診断名の異なる15人を分析から除外した。一般成人のコラージュ作成は会議室，研修室などで行われた。

材　料

2雑誌とカラープリント5枚を紙袋に入れて1セットとした。雑誌は料理，女性ファッションなどをとりあげた女性に人気の高いもの（オレンジページ　1999年6月12日号）と，男性のライフスタイル，ファッションなどをとりあげたもの（ターザン No.306）を用意した。カラープリントはA（海外旅行パンフレットから収集。アフリカ・アメリカの風景)，B（通信販売カタログから収集。雑貨，室内風景)，C（ジグゾーパズルカタログから収集。日本の風景，曼陀羅)，D（ジグゾーパズルカタログから収集。世界の風景，動物のアート画)，E（ジグゾーパズルカタログから収集。名作絵画，動物の写真）の5枚である。これらの材料によって，一般的な臨床場面で用意される材料をほぼ再現していると考えられる。

台　紙

白色の八つ切り画用紙（380mm×270mm)。裏側には作成日，タイトル，年齢，性別，氏名を記入する欄を設けた。

用　具

スティック糊，はさみ，及びタイトルなどを記入するための鉛筆を用意した。

手続き

両群とも集団場面において，材料，台紙，用具を各人に1セットずつ配布した後，材料の紙袋に2誌・5枚の材料がそろっているかを確認してもらった。次に「これからコラージュを作っていただきます。コラージュとは雑誌などを好きなように切り抜いて，台紙の上に貼って作成するものです。今お配りした材料を見て，好きな写真や気に入ったもの，気になるものなどを自由に切り抜き，画用紙に自由に貼って作品を作ってください」と教示し，自由制作を促した。タイトルについては「作品を作った後でタイトルが思い浮かぶ人は記入してください。思い浮かばなければ何も書かなくて結構です」と説明した。

分析方法

次の項目について，一般成人群と分裂病者群のコラージュ作品を比較した（Table 1)。

＜作品全般の特徴に関する比較＞　タイトルの有無，台紙の方向（縦置き・横置き・方向性なし)，台紙の裏返し，はみ出しの有無，切抜きの枚数，重ね貼りの有無，重ね貼りの回数。余白領域の量。余白領域はコラージュ作品を画像処理し，画用紙の大きさに対する空白領域の割合を測量した。台紙の切り取りや両面使用など特殊な作品は分析から除外した。

＜切抜きの形に関する比較＞　以下の形の切抜きの有無：四角形，三角形，その他の多角形，丸，物の形（対象物の輪郭に沿って切り抜いてある)，不定形，手でちぎる，創作（対象物に関係のない何らかの物の形の切抜き。ハート型，星型など)，その他（1ページ全体など)。最も多かった切り抜き形。

＜貼り方などの表現に関する比較＞　結合，分裂といった貼り方の有無。また，次のような切抜きの有無：文字（文字のみの切り抜き)，広告文字（写真などに添えられた文字，説明文など)，白黒，枠のある切抜き。被験者による作品への書き込みの有無。特異な貼り方の有無（ノートのように何枚も片綴じに貼りつけるなど)。

＜材料に関する比較＞　カラープリントA，B，C，D，E，オレンジページ，ターザンの使用の有無。使用した材料の数。

Table 1　コラージュ表現のスコア項目

全体的表現特徴に関するスコア項目		
タイトル	1. 有り	2. 無し
台紙方向	1. 横 2. 縦	3. その他
台紙裏表誤用	1. 有り	2. 無し
切片数	(　　) 枚	
余白量	(　　) %	
はみ出し	1. 有り	2. 無し
重ね貼り	1. 有り	2. 無し
逆さ貼り	1. 有り	2. 無し
切り方に関するスコア項目		
1. 四角	1. 有り	2. 無し
2. 三角	1. 有り	2. 無し
3. その他の角	1. 有り	2. 無し
4. 丸	1. 有り	2. 無し
5. 物の形	1. 有り	2. 無し
6. 不定	1. 有り	2. 無し
7.手でちぎる	1. 有り	2. 無し
8. 創作	1. 有り	2. 無し
最も多い切り方	切り方の番号	(　　)
貼り方などの表現特徴に関するスコア項目		
結合	1. 有り	2. 無し
分裂	1. 有り	2. 無し
文字	1. 有り	2. 無し
広告文字	1. 有り	2. 無し
無彩色	1. 有り	2. 無し
書き込み	1. 有り	2. 無し
材料選択に関するスコア項目		
プリントA：アフリカ	1. 有り	2. 無し
プリントB：雑貨	1. 有り	2. 無し
プリントC：日本・曼陀羅	1. 有り	2. 無し
プリントD：世界・アート	1. 有り	2. 無し
プリントE：絵画・動物	1. 有り	2. 無し
オレンジページ	1. 有り	2. 無し
ターザン	1. 有り	2. 無し
使用材料種類数	(　　) 種類	

内容1（人間・動物の切り抜き枚数）		
人間	全体	(　　) 枚
	部分	(　　) 枚
	合計	(　　) 枚
非現実的人間	全体	(　　) 枚
	部分	(　　) 枚
	合計	(　　) 枚
人間描写・加工		(　　) 枚
動物	全体	(　　) 枚
	部分	(　　) 枚
	合計	(　　) 枚
非現実的動物	全体	(　　) 枚
	部分	(　　) 枚
	合計	(　　) 枚
動物描写・加工		(　　) 枚
内容2（各項目の出現）		
自然風景	1. 有り	2. 無し
室内	1. 有り	2. 無し
建物	1. 有り	2. 無し
植物	1. 有り	2. 無し
食べ物	1. 有り	2. 無し
乗り物	1. 有り	2. 無し
物体	1. 有り	2. 無し
装飾品	1. 有り	2. 無し
血液	1. 有り	2. 無し
性	1. 有り	2. 無し
戦い	1. 有り	2. 無し
模様	1. 有り	2. 無し
マーク	1. 有り	2. 無し
芸術	1. 有り	2. 無し
宗教	1. 有り	2. 無し
スポーツ	1. 有り	2. 無し
子ども	1. 有り	2. 無し
その他	1. 有り	2. 無し
出現内容種類数	(　　) 種類	

＜内容に関する比較＞

以下の内容を含む切抜きの枚数：人間全体，人間部分，人間合計（全体＋部分），人間加工（絵画など），動物全体，動物部分，動物合計（全体＋部分），動物加工，非現実人間全体，非現実人間部分，非現実人間合計（全体＋部分），非現実人間加工，非現実動物全体，非現実動物部分，非現実動物合計（全体＋部分），非現実動物加工。

以下の内容を含む切抜きの有無：風景，室内，建物，植物，食べ物，乗り物，物体，装飾品，血，性的描写，戦い，作品への装飾（縁取りをする，水玉を散らすなど），マーク，芸術，宗教，スポーツ，子ども，その他。内容の領域数。

結　果

度数の比較には χ^2 検定を用いたが，20%以上のセル

において期待度数が5未満の場合は直接確立法を適用した。平均値の差の比較にはt検定を用いた。

作品の全体的特徴

まずコラージュ作品の全体的特徴として，タイトルの有無，台紙の方向，台紙の裏表誤用の有無，はみ出しの有無，重ね貼り・逆さ貼り・横転の有無の出現度数について，一般成人群と分裂病者群で比較した（Table 2）。この結果タイトル（$\chi^2(1)=29.61, p<.001$），重ね貼り（$\chi^2(1)=23.75, p<.001$）は一般成人群が分裂病者群よりも有意に多かった。次に切片数，重ね回数，使用材料数の平均値についてt検定を用いて比較したところ，いずれも有意に一般成人が分裂病者よりも多いことがわかった（Table 3）。空白領域は分裂病者の方が有意に多かった（$t(167)=-2.70, p<.01$）。

切り抜き

切り抜き方の出現度について一般成人群と分裂病者群で比較した（Table 4）。四角形の切り抜きは分裂病者群の98%の作品に見られ一般成人よりも有意に多かったが（$\chi^2(1)=6.09, p<.05$），他の形の切り抜きはほとんど一般成人の方が多く，その他の多角形（$\chi^2(1)=6.68, p<.05$），物の形（$\chi^2(1)=33.37, p<.001$），不定形（$\chi^2(1)=33.36, p<.001$）については有意差が得られ，丸は有意な傾向がみられた（$p=0.05$，両側検定）。最も多い切り方は，一般成人群では四角形（73人），物の形（21人），不定形（17人），その他（5人）と複数の切り方が見られたが，分裂病者群では四角形（57人）不定形（2人）の2種の切り方のみであった。

貼り方などの表現

貼り方などのコラージュ表現の比較において一般成人群の方が有意に多かったのは，結合（$\chi^2(1)=18.03, p<.001$），分裂（$\chi^2(1)=6.09, p<.05$）であり，逆に「広告文字」は分裂病者群に有意に多く見られた（$\chi^2(1)=11.73, p<.01$）（Table 5）。

Table 2　全般的表現特徴の出現度比較

		一般成人群 114人（%）	分裂病者群 59人（%）
タイトル	有り	97（85.1）	27（45.8）***
	無し	17（14.9）	32（54.2）
台紙方向	横置き	98（86.0）	54（91.5）
	縦置き	15（13.2）	4（6.8）
	その他	1（0.9）	1（1.7）
台紙裏表誤用	有り	2（1.8）	3（5.1）
	無し	112（98.2）	56（94.9）
はみ出し	有り	10（8.8）	9（15.3）
	無し	104（91.2）	50（84.7）
重ね貼り	有り	79（69.3）	18（30.5）***
	無し	35（30.7）	41（69.5）
逆さ貼り	有り	（5.3）	5（8.5）
	無し	108（94.7）	54（91.5）
横転貼り	有り	6（5.3）	6（10.2）
	無し	108（94.7）	53（89.8）

†$p<.10$　*$p<.05$　**$p<.01$　***$p<.001$

Table 3　切片数・重ね回数・使用材料数の平均値

	一般成人群 平均（SD）	分裂病者群 平均（SD）	t
切片数	13.27（6.07）	7.56（4.99）	6.62**
重ね回数	6.42（7.12）	1.42（4.36）	5.69**
使用材料数	3.57（1.50）	2.69（1.39）	3.73**

†$p<.10$　*$p<.05$　**$p<.01$　***$p<.001$

Table 4　切り抜き方の出現度比較

		一般成人群 114人（%）	分裂病者群 59人（%）
四角形	有り	99 (86.8)	58 (98.3)*
	無し	15 (13.2)	1 (1.7)
三角形	有り	3 (2.6)	0 (0.0)
	無し	111 (97.4)	59 (100.0)
多角形	有り	16 (14.0)	1 (1.7)*
	無し	98 (86.0)	58 (98.3)
丸	有り	8 (7.0)	0 (0.0)†
	無し	106 (93.0)	59 (100.0)
物の形	有り	70 (61.4)	9 (15.3)***
	無し	44 (38.6)	50 (84.7)
不定形	有り	67 (58.8)	8 (13.6)***
	無し	47 (41.2)	51 (86.4)
ちぎる	有り	3 (2.6)	1 (1.7)
	無し	111 (97.4)	58 (98.3)
創作	有り	3 (2.6)	0 (0.0)
	無し	111 (97.4)	59 (100.0)
その他	有り	3 (2.6)	4 (6.8)
	無し	111 (97.4)	55 (93.2)

†$p<.10$　*$p<.05$　**$p<.01$　***$p<.001$

Table 5　貼り方などの表現特徴の出現度比較

		一般成人群 114人（%）	分裂病者群 59人（%）
結合	有り	29 (25.4)	0 (0.0)***
	無し	85 (74.6)	59 (100.0)
分裂	有り	15 (13.2)	1 (1.7)*
	無し	99 (86.8)	58 (98.3)
文字	有り	17 (14.9)	4 (6.8)
	無し	97 (85.1)	55 (93.2)
広告文字	有り	65 (57.0)	49 (83.1)**
	無し	49 (43.0)	10 (16.9)
白黒	有り	17 (14.9)	4 (6.8)
	無し	97 (85.1)	55 (93.2)
書き込み	有り	5 (4.4)	2 (3.2)
	無し	109 (95.6)	57 (96.6)
枠のある切抜き	有り	6 (5.3)	6 (10.2)
	無し	108 (94.7)	53 (89.8)
その他	有り	5 (4.4)	6 (10.2)
	無し	109 (95.6)	53 (89.8)

†$p<.10$　*$p<.05$　**$p<.01$　***$p<.001$

Table 6　材料別使用度比較

		一般成人群 114人（%）	分裂病者群 59人（%）
プリントA	有り	62（54.4）	23（39.0）†
（海外風景）	無し	52（45.6）	36（61.0）
プリントB	有り	28（24.6）	16（27.1）
（雑貨）	無し	86（75.4）	43（72.9）
プリントC	有り	54（47.4）	29（49.2）
（日本・曼陀羅）	無し	60（52.6）	30（50.8）
プリントD	有り	47（41.2）	28（47.5）
（世界・動物）	無し	67（58.8）	31（52.5）
プリントE	有り	49（43.0）	32（54.2）
（名画・動物）	無し	65（57.0）	27（45.8）
オレンジページ	有り	87（76.3）	11（18.6）***
	無し	27（23.7）	48（81.4）
ターザン	有り	74（64.9）	20（33.9）***
	無し	40（35.1）	39（66.1）

†$p<.10$　*$p<.05$　**$p<.01$　***$p<.001$

Table 7　人間・動物の切り抜き枚数平均値

	一般成人群 平均（SD）	分裂病者群 平均（SD）	t
人間全体	1.11（1.37）	0.92（1.26）	0.89
人間部分	1.07（1.71）	0.61（1.13）	1.86†
人間合計	2.16（2.36）	1.49（2.01）	1.85†
非現実的人間全体	0.57（1.35）	0.49（1.01）	0.39
非現実的人間部分	0.01（0.09）	0.00（0.00）	0.72
非現実的人間合計	0.58（1.36）	0.49（1.01）	0.44
人間加工	1.18（2.08）	1.25（2.02）	−0.21
動物全体	1.58（1.92）	1.29（1.65）	0.99
動物部分	0.75（1.02）	0.44（0.68）	2.42*
動物合計	2.25（2.59）	1.75（2.02）	1.32
非現実的動物全体	0.04（0.28）	0.00（0.00）	1.68†
非現実的動物部分	0.01（0.09）	0.00（0.00）	0.72
非現実的動物合計	0.05（0.35）	0.00（0.00）	1.60
動物加工	0.59（1.09）	0.49（1.12）	0.55
内容の種類数	6.18（2.32）	5.24（2.37）	2.52*

†$p<.10$　*$p<.05$　**$p<.01$　***$p<.001$

材料の使用

5枚のプリント（A，B，C，D，E）と雑誌オレンジページ，ターザンの使用の有無について一般成人群・分裂病者群間で比較したところ（Table 6），オレンジページ（$\chi^2(1)=52.66, p<.001$），ターザン（$\chi^2(1)=15.07, p<.001$）の使用は一般成人の方が分裂病者よりも有意に多く，プリントA（$\chi^2(1)=3.69, p<.10$）は一般成人の方が多い傾向が見られた。使用した材料数に

Table 8　内容別出現度比較

		一般成人群 114人（%）	分裂病者群 59人（%）
自然風景	有り	83（72.8）	37（62.7）
	無し	31（27.2）	22（37.3）
室内	有り	20（17.5）	13（22.0）
	無し	94（82.5）	46（78.0）
建物	有り	48（42.1）	35（59.3）*
	無し	66（57.9）	24（40.7）
植物	有り	64（56.1）	29（49.2）
	無し	50（43.9）	30（50.8）
食べ物	有り	64（56.1）	14（23.7）***
	無し	50（43.9）	45（76.3）
乗り物	有り	45（39.5）	3（5.1）***
	無し	69（60.5）	56（94.9）
物体	有り	65（57.0）	24（40.7）*
	無し	49（43.0）	35（59.3）
装飾品	有り	23（20.2）	4（6.8）*
	無し	91（79.8）	55（93.2）
血	有り	0（0.0）	0（0.0）
	無し	114（100.0）	59（100.0）
性	有り	20（17.5）	15（25.4）
	無し	94（82.5）	44（74.6）
戦い	有り	3（2.6）	6（10.2）†
	無し	111（97.4）	53（89.8）
作品への飾り	有り	5（4.4）	0（0.0）
	無し	109（95.6）	59（100.0）
マーク	有り	0（0.0）	2（3.4）
	無し	114（100.0）	57（96.6）
芸術	有り	48（42.1）	29（49.2）
	無し	66（57.9）	30（50.8）
宗教	有り	27（23.7）	12（20.3）
	無し	87（76.3）	47（79.7）
スポーツ	有り	21（18.4）	8（13.6）
	無し	93（81.6）	51（86.4）
子ども	有り	7（6.1）	0（0.0）*
	無し	107（93.9）	59（100.0）
その他	有り	4（3.5）	3（5.1）
	無し	110（96.5）	56（94.9）

†$p<.10$　*$p<.05$　**$p<.01$　***$p<.001$

ついては全体的特徴の項で述べたように，一般成人の方が有意に多い。

内容分析

人間と動物の量（一人当たりの切り抜き枚数の平均値）に関する比較はTable 7に，その他の内容の出現度数についての比較はTable 8に結果を示した。人間に関してはほとんどのカテゴリーにおいて一般成人群が分裂病者群よりも多く切り抜きを貼っており，「人間部分」と「人間合計」は有意に多い傾向（$p<.10$）が見られる。分裂病者群の切り抜き数の方が上回ったのは「人間加工」のみである。動物に関してはすべてのカテゴリーで一般成人が分裂病者を上回り，「動物部分」では有意差（$p<.05$），「非現実動物全体」で有意な傾向（$p<.10$）が見られた。

他の内容では，「食べ物」（$\chi^2(1)=16.50, p<.001$），「乗り物」（$\chi^2(1)=22.93, p<.001$），「装飾品」（$\chi^2(1)=5.39, p<.05$）は一般成人群が分裂病者群よりも有意に多く出現し，「物体」（$\chi^2(1)=4.16, p<.05$），「子ども」（$p=.097$,両側検定）も一般成人群の方が多い傾向が見られる。分裂病者群の方が有意に出現度が高かったのは「建物」（$\chi^2(1)=4.62, p<.05$）であり，「戦い」については有意な傾向（$p=.064$，両側検定）が見られた。

また内容種類数の平均値は，一般成人群の方が有意に高い（$t(171)=2.52, p<.05$）。

考　察

分裂病者のコラージュにおける形式的特徴

一般成人における切り抜き数や重ね貼りの多さ，分裂病者の空白領域の多さはこれまで報告されてきた傾向に一致するものとなった。分裂病者の認知的歪みからくる「はみ出し・逆さ貼り・横転貼り」の多さが予想されたが，有意な結果は得られなかった。分裂病者のコラージュ作品の多くに粗雑さやバランスの悪さなどが感じられるのは，おそらく明らかなはみ出しや横転などによって計測されるのではなく，わずかな貼り方の歪みや切り方の粗雑さなどが重なって生じているのであろう。

切り抜き方では，一般成人では四角形，丸，物の形，不定形といろいろな切り方が見られるのに対し，分裂病者は圧倒的に四角形の切り方に偏っていることがわかる。これが「機械的」「単純」（越，1998）といった印象につながっていると考えられる。

貼り方などのコラージュ表現においても，一般成人群は「結合」「分裂」などの手法を用いて，作品にメッセージ性を伴わせたり，単なる写真の羅列ではない自己表現を行なったりしている。「文字」もまたコラージュ作品に強いメッセージを与えるものであり，一般成人での出現が上回っているが，有意な結果は得られなかった。ところが「広告文字」を分裂病者の方が多く用いている。「文字」はまさしく文字のみの切り抜きであり，「広告文字」は写真に添えられた説明文やコピーである。分裂病者の方が上回っているのは，おそらく彼らが対象物の周辺を大雑把に切り抜くため，周囲の文章なども混じってしまうのに対し，一般成人は周囲の文章を意図的に排除して対象物だけを注意深く切り抜くという行為がみられるためではないだろうか。上述の「物の形」はまさにそのように対象物を切り出したものである。

材料については，雑誌2誌はいずれも一般成人が多く使用し，プリントAも一般成人に多い傾向が見られた。雑誌2誌はプリントよりも圧倒的に写真数・情報量が多いことから，情報処理的な能力が低下しており，活動性も低い分裂病者にとっては扱いにくい材料であったのだろうか。また「この雑誌本当に切ってもいいんですか」という問いが分裂病群で複数みられたことから，雑誌という完成した対象を破壊することへの不安が生じていた可能性も考えられる。では，プリント素材での差は何によって生じているのであろうか。一般成人に多く使われたプリントAはアフリカの大草原を象の群が横切っている壮大な自然風景が含まれている。風景写真を用いる場合，一般成人は周辺に人物や物体などを配することによって，うまく風景を「地（背景）」として利用している。しかし分裂病者は「図」と「地」の立体的構成を認知する能力が低いため，風景写真を何枚も並べて「図」として用いることがみられ，風景写真の他に物体を貼っていたとても，その全てが「図」として前景化してしまう。これを岡田・河野（1996）は「極端な前景化」と呼んでいる。プリントAの風景写真は美しく魅力的であるがサイズも大きいため，他の素材を吟味し構成を考慮しないとコラージュ作品にうまく収めることは難しい。分裂病者は材料選択の時点で，図と地の構成化が必要となるような素材の使用を避けたために，プリントAの利用が少なかったものと考えられる。

分裂病者のコラージュにおける内容的特徴

まず，人間部分と人間合計について，一般成人の方が分裂病者よりも使用枚数が多い傾向があり，動物部分は一般成人の方が多い。ロールシャッハにおける人間反応が他者への共感性や社会性の指標となっているように，コラージュにおいても分裂病者の他者への関心の乏しさが人間の切り抜き数の少なさとして表れていると考えられる。また同時に一般成人は人間や動物の中で顔や上半身，手などの使いたい部分を自由に切り取って使用することができるのに対し，分裂病者は対象を自由に扱うこ

とができず，全体像として使用することが多いのではないだろうか。「顔」や「手」などの部分使用が目立つ臨床例（服部，1999，杉浦，1994）の多くは神経症圏内の事例報告であり，分裂病者においてはむしろ部分的な使用が少ないことがわかる。これは，貼り方の表現における「分裂」と同じ意味を持つと考えられ，対象と向き合う際の分裂病者の不自由さや硬さとも言うことができるだろう。

さらに人間や動物といった生命有るものが分裂病者の作品には少ないということは，「貧弱な内容のものが多い」（杉浦，1994）というコラージュ作品の印象を形成する基になっていると考えられる。

非現実的動物が一般成人に多い傾向が見られるのは，非現実的動物が多くの場合，ユーモラスな漫画的表現のキャラクターであることと関係があると思われる。このキャラクターを用いることによって，作品に「遊び」的要素が加わっている。こういった遊び的要素の少なさも，分裂病者の作品の平板さに関与しているだろう。

他の項目の出現度では，「食べ物」「乗り物」「子ども」が一般成人に多い。ロールシャッハにおける食べ物は口唇期的欲求，依存欲求を示すものとされ，越（1998）もその文脈から解釈を加えている。確かにコラージュの食べ物がそういった意味を持つ可能性も考えられるが，雑誌掲載写真の食べ物は，カラフルで美しく，むしろ健康的な食欲やエネルギーの源としての食べ物を連想させる。「乗り物」は一般成人と分裂病者の活動性の違いを考えると，作成者の行動性や外界への関心を表すのではないだろうか。「子ども」は「人間」に含まれるものでもあるが，実際の子どもの切り抜きは大人の写真と比べて表情豊かであり，家族や親子の形で表されている。分裂病者の多くが長期入院患者で家族と離れ，自身の子どもを持っていない可能性が高いのに対し，一般成人の多くが家族や子どもと暮らしていると考えられることから，子どもへの関心や愛着が大きく異なっているために差が生じたのではないだろうか。

また「物体」「装飾品」も一般成人に多いが，これらは作成者の個性や自己主張を感じさせる。物体は何の意味もない「物」ではなく，表現の小道具としてうまく利用されており，「装飾品」とは異なるが，作品全体を装飾する意図や作品に意味を持たせる作用は持っているだろう。こういった自己主張を感じさせる「図的要素」に対し，分裂病者に有意に多かった「建物」は「地的要素」と考えることができる。しかし自然風景などと比べると建物の方が図に近いため，「中間的要素」と言うことができよう。材料に関する考察で触れたように分裂病者は地的要素も前景化させて「図」として用いるが，サイズの大きな風景写真よりは建物の写真の方が図として用いやすく，また「物体」や「装飾品」よりは特定の意味や自己主張を伴わないために使用しやすいのであろう。

次に「戦い」は分裂病者群に多い傾向がみられた。一般成人は攻撃性を車やスポーツなど異なった表現におきかえたり，ひねりを加えて表現するのに対し，分裂病者は直接的な表現をするためであろう。これはロールシャッハなどでも分裂病者に直接的・破壊的な表現がみられるのと同じものと考えることができる。越（1998）では「武器」に有意差は見られなかったが，「性」の出現度は有意に異なり，その表現も分裂病群はかなり露骨であると指摘している。本研究では，性的描写の出現度は分裂病者が上回るものの，有意差は見られなかった。またその具体的内容であるが，越（1988）では「武器」「性」について用意された材料の中に非常に直接的な素材（ナイフ，裸体など）が複数含まれていたことが作品例からわかる。本研究においては統一材料の中にそういった直接的なものは含まれておらず，戦いでは名作絵画の戦い，性的表現では水着姿の女性などをカウントした。このように用意された材料によって表現が違ってくることから，今後材料の選択についてもさらに検討が必要である。

今後の課題と展望

方法及び結果に明らかな通り，本研究ではコラージュ作品についての印象評定を行なっていない。しかし「明るい」「粗雑」「落ち着いている」といった印象は，一般成人群と分裂病者群で異なるであろうし，そういった印象の中には，形式分析・内容分析では測定しきれない重要な特徴が含まれるものと考えられる。これまでのコラージュ作品の量的研究において印象はごく簡単に評定されていたり，評定内容や評価の信頼性について十分な検討がなされないまま評定されてきている。印象の評定はコラージュ作品を自己表現や心理療法として用いるだけでなく，アセスメントとして用いる可能性につながるものである。項目内容や評価の信頼性について十分な検討を行なって印象評定尺度を作成したうえで，様々な対象群のコラージュ表現の特徴について明らかにしていくことが今後の重要な課題である。また，コラージュ表現における「前景化」「背景化」といった構成的特徴の評定や，切り抜き間の関連性の評定なども今後の課題である。

次に，対象者についても検討の余地がある。分裂病者にはさまざまな状態像が考えられる。本研究においては，単科精神病院入院患者を対象としていることから，慢性期分裂病患者が対象者の多くを占めたと考えられる。上別府（1999）は，「分裂病者はたった一枚の絵しか使わない（Buck & Provancher, 1972）」「貧弱な内容のものが多い（杉浦，1994）」「重ね貼りが少ない（森谷ほか，

1992)」などの分裂病患者のコラージュ表現に関するこれまでの報告に対し，自身の研究結果と食い違っていると指摘し，その理由として病型や発症後の経過年数などの違いがある可能性を示唆している。発症後の経過年数や病型などによる違いについてさらに詳細な検討を重ねる必要があろう。また経験的には，非定型精神病患者のコラージュ表現は一般成人に近いような豊かな感情表現を含みつつも同時に不安定で，危うさや攻撃性の過剰な表出がみられるものが多いと感じられる。今回これらの作品をいくらか収集しながらも量が少なかったために分析から除外した。今後こういった分裂病の近接領域についてもデータの収集を重ね，病態によるコラージュ表現の違いについて明らかにする必要がある。

結　論

本研究において統一材料を使用し，分裂病患者のコラージュ表現については，切片数の少なさ，切り方・貼り方における表現の乏しさ，人間像の少なさや内容における活動性の乏しさ，空間的認知特徴などが明らかになった。これらの結果は，これまでの事例報告からの記述や非統一材料を用いた量的研究と概ね同じ傾向を示している。その一方で統一材料を使用にすることにより，新たに材料別の使用度について検討することが可能となった。本研究における材料別比較から，分裂病者が雑誌の使用に抵抗感を感じている可能性や背景化の困難な認知的特徴が材料選択や表現内容に影響を及ぼしている可能性が推察された。この点についてはさらに厳密な検討が必要である。また材料別使用度の違いは他にも様々な対象群において生じる可能性があり，コラージュ表現の研究において統一材料を使用する必要性を示した。

引用文献

Buck, R.E., & Provancher, M.A. 1972 Magazine picture collage as an evaluative technique The American Journal of Occupational Therapy, 26. 1, 36-39.

服部令子　1999　対人恐怖症者の表現特徴　現代のエスプリ 386　至文堂　143-152.

越　晴香　1998　コラージュにみられる精神分裂病者の精神病理　茨城大学大学院人文科学研究科1997年度修士論文（未公刊）

上別府圭子・海老沢左知恵　1996　臨床場面におけるコラージュ使用上の留意点－学会ワークショップおよび精神分裂病者のコラージュの検討　臨床描画研究 XI　金剛出版　60-82.

上別府圭子　1999　臨床場面におけるコラージュの安全性の再検討－主に精神分裂病者の「貼る過程」について　現代のエスプリ386　至文堂　164-174.

三輪友木子　1999 自然に共にいることをめざして－分裂病者小集団へのコラージュによる心理療法，渡辺雄三編　仕事としての心理療法　人文書院　237-260.

森谷寛之ほか　1992　体験コラージュ療法　山王出版

森谷寛之　1983　枠づけ効果に関する実験的研究－バウムテストを利用して　教育心理学研究　31. 1. 53-58

Lerner, C., & Ross, G. 1977 The magazine picture collage: Development of an objective scoring system. The American Journal of Occupational Therapy, 31, 3, 156-161.

Lerner, C.J. 1979 The Magazine Picture Collage: Its Clinical Use and Validity as an Assessment Device The American Journal of Occupational Therapy, 33, 8, 500-504.

岡田　敦・河野荘子　1997　分裂病者のコラージュ表現について－特に構成上の特徴と変化をめぐって　日本心理臨床学会15回大会発表論文集，466-467.

岡田　敦　1999　分裂病者のコラージュ表現について－大コラージュボックス法の臨床的利用　現代のエスプリ386　至文堂，118-131.

佐藤　静　1998 コラージュ療法の基礎的研究－コラージュ制作過程の分析－　心理学研究，69，287-294

佐藤　静　1999 コラージュ作品構造と素材図版の推移連鎖構造の分析　心理学研究，70，120-127

杉浦京子　1994 コラージュ療法　基礎的研究と実際　川島書店

滝口正之・山根敏宏・岩岡眞弘　1999　コラージュ作品の発達的研究（集計調査）　現代のエスプリ386，至文堂，175-185.

（2001年9月20日　受稿）

謝　辞

コラージュを作成してくださった皆様と，ご協力下さった病院関係者の方々に深謝申し上げます。また煩雑な画像処理作業を助けてくださった冨澤文江さん，久利恭士さんに感謝いたします。

原　　著

ABSTRACT

The Expression on Collages of Schizophrenics
— Quantitative analysis Using unified material —

Yukiko IMAMURA

To investigate features of expression on collages made by schizophrenics, 59 schizophrenic inpatients and 114 normal adults made collages, with given unified materials; two volumes of magazines and five sheets of paper from catalogue. Comparative group analysis revealed collages by schizophrenics have a) fewer cuttings, b) inexpressive cutting forms and layouts, and c) fewer use of life objects (people, animals and children) and objects related to activity or self-expressions (foods, vehicles, and accessories). Quantitative analysis on tendency of use among unified materials indicated schizophrenics prefer some sheets of paper to magazines or the sheet which seemed more difficult to organize. Implications of these findings are discussed in relation to furthering understanding of their cognitive features.

Key words: collage, schizophrenic, unified materials